

第4章

縁の解析・評価



第4章 緑の解析・評価

1. 旧3町の「緑の基本計画」の評価

旧3町においては、平成13年から14年にかけて、以下のように「緑の基本計画」を策定し、地域の歴史、文化及び自然を踏まえて、緑豊かな景観づくりや自然環境の保全といった緑の役割を発揮させるよう取組んできました。

その後、旧3町が平成19年3月に合併して、新たに木津川市が誕生しました。

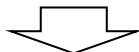
木津川市では、平成21年3月に「第1次木津川市総合計画」を策定し、「水・緑・歴史が薫る文化創造都市」を将来像とするまちづくりをスタートさせています。

総合計画では、「歴史・文化や自然・環境を活かした美しいまちづくり」、「市民が主人公のまちづくり」などをまちづくりの柱として、豊かな水と緑の自然環境を活かし、市民の参画と協働による多様な“人と地域文化”が交流するまちづくりに取組むこととしており、それらの方針にそって、旧3町の成果を受け継ぎながら、新たに統合された「緑の基本計画」を策定します。

表 旧3町の緑の基本計画概要

	旧木津町	旧加茂町	旧山城町
基本理念	みどりの回廊(エコロジカルコリダー)の形成	ゆとりと潤いのある生活ができる田園都市の形成	水と緑の保全と活用を軸に、主な歴史資源、公共空間、旧市街地、産業拠点等の公園化と緑のネットワーク整備
基本方針	①公共交通施設の緑化 ②民有地の緑化 ③民間の参加協力等の促進	①加茂町を特徴づける緑の維持・保全 ②生活に潤いをもたらす身近な緑の充実・創造 ③様々な役割を果たす緑のネットワークの形成 ④住民参加による緑のまちづくりの推進	①自然と歴史を活かす ②親しめる空間づくり ③緑のネットワークづくり ④住民参加による緑のまちづくりの推進
緑地目標量	①市街化区域の30% ②町全体の51.3%	①市街化区域の概ね34% ②町全体の概ね89%	①市街化区域の概ね31.2% ②町全体の概ね60.1%
目標年次	中間年次・平成20年 目標21世紀初頭	平成22年	平成22年

都市公園等 の目標水準 (上段:都市公園 下段:都市公園等)	現況 6.44 m ² /人 (63ha)	目標 8.49 m ² /人 (200ha)	現況 3.75 m ² /人 (6ha)	目標 5.16 m ² /人 (153ha)	現況 5.16 m ² /人 (9ha)	目標 103.71 m ² /人 (144ha)
方向性	エコロジカルコリダーの形成を目指して、都市公園等の目標においても、旧建設省の目標(20 m ² /人)を超える設定を行っている。 緑地確保では、木津川河川敷を広域レクリエーションの場とすること、及びオオタカ営巣地としての鹿背山を緑地保全し、広域的な施設緑地形成を目指していた。	ゆとりと潤いのある田園都市を目指し、都市公園等の整備目標のうち「その他公園緑地」について、木津川河川敷、山の家周辺緑地などを含み、多くの緑地確保を目指していた。	町全体の水と緑の保全・活用を軸に公園化を図るもので、国営公園によって都市公園の大幅な緑地保全を目指していた。 町全体の土地利用の特徴は新たな広域幹線整備に併せて、新産業用地の確保と木津川等での緑地確保を目指していた。			
評価	旧3町ともに、学研都市の進歩を受けて、木津川、丘陵部での広域的な緑地確保を目指したが、必ずしも想定していた大規模な施設緑地の確保には至らなかった。 都市公園については、国営公園を除いて概ね整備が進み、平成24年3月現在、市域内都市公園面積は62.86ha、8.8 m ² /人と概ね3町の目標水準に達している。					



木津川市総合計画 将来像

「水・緑・歴史が薫る文化創造都市 ～ひとが耀き ともに創る 豊かな未来～」

関西文化学術研究都市の中核都市として、本市の自然・歴史・文化と最先端の学研都市機能の融合により、さらに魅力と活力のあるまちづくりを進める。

＜まちづくり施策＞

■個性を活かした魅力ある地域文化の創造

- ・水・緑・歴史のネットワークづくり

(水・緑・歴史のネットワークの構築/木津川や旧奈良街道、旧伊賀街道等の保全と活用)

■環境と調和した持続可能なまちの創造

- ・身近な自然の保全と活用

(木津川や山々の緑の保全と育成/宅地内緑化の推進/公園緑地等の整備/農地の保全活用)



木津川市緑の基本計画への展開

2. 緑の解析・評価

環境保全機能・レクリエーション機能・防災機能・景観形成機能の4つの視点からの解析・評価を行います。解析・評価にあたっては、緑の現況を踏まえながら、一方で市民の緑の保全や緑化推進についての意向を「市民アンケート調査」などから把握し、検討を行います。なお、「緑のネットワーク」とは人の活動が「公園・緑地」「河川」「街路」などの緑を介してつながっていくことを表しています。

解析の方法は4つの役割別を行い、それぞれの要素に該当するものを明らかにし、各機能において重要な役割を担っている緑を抽出します。

各機能別の解析する要素は、以下の表のとおりとします。

表 緑の役割と要素

都市の緑の役割	解析する要素
1. 環境保全機能 (人と自然が共生する都市環境を確保する)	<ul style="list-style-type: none">木津川市の骨格を形成する自然との共生に資する歴史的な風土を有する快適な生活環境の形成や都市環境負荷の軽減に資する
2. 景観形成機能 (潤いのある美しい景観を形成する)	<ul style="list-style-type: none">景観資源となるランドマークやシンボルとなる
3. レクリエーション機能 (余暇需要の変化に対応した余暇空間を確保する)	<ul style="list-style-type: none">日常圏におけるレクリエーションの場を提供する広域圏におけるレクリエーションの場を提供するネットワークや回遊性を有する
4. 防災機能 (都市の安全性・防災性を高める)	<ul style="list-style-type: none">自然災害の防止対策が必要となる市街地における火災等の防止に資する避難や防災機能を有する

評価対象とする緑は、以下のとおり、市民アンケートの調査項目である、市内で守りたい「緑」とします。

評価対象とする緑
<ul style="list-style-type: none">里地里山などの緑公園や緑地や広場街路の並木学校や公共施設の緑府県境の緑地木津川社寺や文化財と一体となった緑田や畠などの農地ため池や身近な河川等の水辺住宅の庭木や生垣

(1) 環境保全機能の解析・評価

①目指すべき環境像

「木津川市環境基本計画」では、本市の環境像として、「人と環境が共生するまち木津川市」を掲げています。また、施策の基本方針（自然環境）において「木津川や里山の保全・継承とそこに生息する動植物の生態系の保護」、「空き地や休耕地の適正管理と美しい景観の保全」という方向性を示し、市のシンボルである木津川等の環境を保全するとともに、地域の田園・里山風景などの良好な景観の創造に努めることとしています。

②環境保全にかかる緑

環境保全機能を有する緑は、「木津川市の骨格を形成する」、「自然との共生に資する」、「歴史的な風土を有する」、「快適な生活環境の形成や都市環境負荷の軽減に資する」といった要素により該当するものに対し、ポイントづけし、解析・評価をします。

表 環境保全の解析

環境保全の要素	里地里山などの緑	木津川	公園や緑地や広場	社寺や文化財と一緒にした緑	街路の並木	田や畠などの農地	学校や公共施設の緑	ため池や身近な河川等の水辺	府県境の緑地	住宅の庭木や生垣
木津川市の骨格を形成する	●	●								
自然との共生に資する	●	●				●		●		
歴史的な風土を有する				●						
快適な生活環境の形成や都市環境負荷の軽減に資する	●	●	●		●	●	●	●	●	●
ポイント	3	3	1	1	1	2	1	2	1	1

環境保全機能としては、特に里地里山などの緑と木津川が重要な役割を担っています。

③市民アンケート調査からみる環境保全

- とりわけ守りたい「緑」としては、「里地里山などの緑」をあげる意見が多く、ついで「木津川」、「公園や緑地や広場」、「社寺や文化財と一体となった緑」などであり、本市の緑の骨格をなすものが表れています。
- 「緑」に期待するものでは、「心身の癒しや安らぎの場」、「空気をきれいにして騒音を和らげる」、「二酸化炭素を吸収して地球温暖化防止」などが多く、身の回りの環境保全の役割を重視していることがうかがえます。

④環境保全機能の方向性

本市の緑地は、木津川と市街地と集落を取り巻く里地里山を骨格にして、構成されていますが、市街地の拡大等によって、「緑地」は身近なものから距離を置いた存在となっています。そのため、骨格的な緑の保全と合わせて、新たな市街地等での自然に触れ合える公園などの緑地整備と河川、緑道によるネットワーク形成が求められています。まとまった緑地には、優れた自然や地域の誇りとしての歴史資産が息づいており、良好な農林業地は、河川やため池といった水系とともに保全され、地域固有の里地里山景観を作り出しています。こうした自然や歴史風土も含めた「里地里山の緑」の保全が求められています。

こうした里地里山の緑、河川などによって構成される緑のネットワークによって、都市環境負荷の軽減に資する緑の保全が期待されています。



▲里地里山の緑



▲木津川

(2) 景観形成機能の解析・評価

①学研都市と地域の景観

本市を含む木津川左岸地域に展開する関西文化学術研究都市では、平成20年9月に「関西文化学術研究都市（京都府域）における景観の形成に関する計画」（以下、学研景観計画）が策定されています。

当該計画は、景観法の制定（平成16年6月公布）及び京都府景観条例の制定（平成19年3月公布）を踏まえて、これまでの取組を継承するとともに、平成20年10月1日から景観法の届出等により実効性の高い景観形成を進めるものです。

（参考）学研景観計画

＜景観形成の基本理念＞

- ・自然と生活の調和や都市的交流の場を創出し、未来を拓く知の創造都市にふさわしい緑と水辺及び生活のある街並みの形成
- ・国際的に誇れる、日本を代表する歴史、豊かな地域特性を持つ文化を活かした街並みの形成

（学研都市の景観特性）

南山城盆地の地域の地形は、木津川の流れを軸に、これに沿う形で平地、丘陵地、台地、山地と比較的緩やかな勾配で層をなすように構成されており、このような特徴的な地形が、重層的な景観の基礎となっています。

- ・木津川、天井川及び丘陵部の縁地帯が地域の景観を大きく特徴づけています。
- ・丘陵斜面は特徴的な里山景観であり、社寺、遺跡を含む歴史文化的雰囲気が漂っています。
- ・府県境尾根部は既成市街地からの遠景としてゆるやかなスカイラインを形成しています。
- ・甘南備山、飯岡、鹿背山が独立峰、丘陵としての地域のランドマークとなっています。
など

この景観計画では、学研都市内の文化学術研究地区を主に対象として、緑化やセットバック（道路からの壁面後退距離）などを景観形成基準として示しているものであり、既存市街地に適用されているものではないですが、その景観形成の考え方を踏まえた地域の景観形成を検討する必要があります。



▲恭仁宮跡（山城国分寺跡）



▲学研地区内の研究所

②景観形成にかかわる緑

景観形成機能を有する緑は、「景観資源となる」、「ランドマークやシンボルとなる」といった要素により該当するものに対し、ポイントづけし、解析・評価をします。

表 景観形成の解析

景観形成の要素	里地里山などの緑	木津川	公園や緑地や広場	社寺や文化財と一緒にとなった緑	街路の並木	田や畠などの農地	学校や公共施設の緑	ため池や身近な河川等の水辺	府県境の緑地（文化学術研究地区）	住宅の庭木や生垣
景観資源となる	●	●		●					●	
ランドマークやシンボルとなる	●	●		●						
ポイント	2	2	0	2	0	0	0	0	1	0

景観形成機能としては、里地里山などの緑、木津川、社寺や文化財と一緒にとなった緑が重要な役割を担っています。

③市民アンケート調査の結果からみる景観形成

○地域を代表し、特徴づけている景観として、市民が強く意識し、「守りたい緑」は、「里地里山などの緑」や「木津川」などです。

○今後の「緑」を守り育てていく施策では、「山間部などの自然環境の保全」が最も多く、ついで「公園などの整備充実」となっています。里地里山などの緑の保全活用と、身の回りの公園・緑地の整備充実が求められています。

④景観形成機能の方向性

学研都市の景観形成を踏まえながら、市民アンケート調査からみる緑の骨格についての市民の意向を考えると、「里地里山の緑」の保全、「木津川」を中心とする河川の保全を基調に、緑化の推進などに取組む必要があります。また、「里地里山の緑」の中で、「鹿背山」、「木津川」は地域のランドマークとしてとらえられており、積極的な保全が求められています。

(3) レクリエーション機能の解析・評価

①余暇時間の増大とレクリエーション空間

社会動向として、余暇、自由時間が増大し、また、「生活で重視したいもの」も「住生活」から「レジャー・余暇」に移り変わってから久しく、そのための対応として、レクリエーション空間の必要性が高まっています。

レクリエーション空間としては、身近な公園・緑地、より広域的な野外活動場所及びそれらのネットワーク空間などがあり、住民ニーズに対応した必要な空間整備が求められています。

②レクリエーションにかかる縁

レクリエーション機能を有する縁は、「日常圏におけるレクリエーションの場を提供する」、「広域圏におけるレクリエーションの場を提供する」、「ネットワークや回遊性を有する」といった要素により該当するものに対し、ポイントづけし、解析・評価をします。

表 レクリエーションの解析

レクリエーションの要素	里地里山などの縁	木津川	公園や緑地や広場	社寺や文化財と一緒になった縁	街路（の並木）	田や畠などの農地	学校や公共施設の縁	ため池や身近な河川等の水辺	府県境の縁	住宅の庭木や生垣
日常圏におけるレクリエーションの場を提供する			●				●	●		
広域圏におけるレクリエーションの場を提供する	●	●		●						
ネットワークや回遊性を有する					●					
ポイント	1	1	1	1	1	0	1	1	0	0

レクリエーション機能としては、日常圏、広域圏等でそれぞれの役割を担っています。

③市民アンケート調査の結果にみるレクリエーションニーズ

○身近な公園・緑地についての利用は必ずしも進んでいませんが、その理由として考えられるのは「身近な公園・緑地が少ない」、「公園内の設備が物足りない」とするもので、前者は木津地域（既存地区）、山城地域で多く、後者は木津地域（学研地区）で多くなっています。

○公園・緑地にほしい施設・設備は、「散歩ウォーキングなどができる道」が最も多く、ついで「ベンチなどの休憩施設」、「生き物がいる自然の樹木や池」、「子供のための遊具」などが主なもので、自然と触れ合うニーズ（中高年）と子どもニーズの双方が表れ、また、施設のネットワークも求められています。

○より広域の野外活動場所については、全体では必ずしも出かけているという結果ではありませんが、40歳以下の世代及び木津地域（学研地区）において、「公園・緑地」によく出かけている様子がうかがえ、そこでの主な活動は、自然観察とまち歩きなどです。

全体的には、場所の数量、設備等の問題が指摘されているものの、周辺で一定の野外活動場所が確保されていることがうかがえます。主な野外活動場所は、木津川市内では、学研地区内の公園、木津川、当尾の里であり、その他奈良公園、けいはんな記念公園（精華町）、木津川河川敷（木津川市、笠置町）などです。広がりのある野外活動場所として、周辺の山や木津川への志向が表れています。



▲学研地区内の公園



▲淨瑠璃寺

④レクリエーション機能の方向性

身近な公園・緑地については、既存市街地において「公園・緑地が少ない」とする意見が多く、新市街地では、「自然との触れ合い」などのニーズが高くなっています。そのため、日常圏におけるレクリエーションの場として、身近な公園・緑地の整備を促進するとともに、設備の充実とそれらのネットワークを図ることが必要です。

また、本市は学研都市を含むエリアとして広域的な役割をもち、一方、市民からもより広域的なレクリエーション活動の場として「丘陵・里地里山」や「木津川」への志向が表れており、今後、その利用のあり方の検討が必要です。

(4) 防災機能の解析・評価

①過去の災害状況（木津川市地域防災計画 平成19年3月）

災害については、自然災害や公災害など多様ですが、本市では自然災害への対応が重要です。

これまでに受けた大きな災害としては、昭和28年8月15日の南山城水害を挙げることができます。同年の9月の台風13号により、さらなる被害を受けました。

本市における過去の災害状況を総括的にみると、木津川右岸と左岸に二分されるため、南山城水害時のように、右岸と左岸で被害の形態が異なっています。

- ・木津川左岸に位置する木津地域では、地形的に水害を受けやすいはん濫源が広がっていることや、木津川の支流の多くが天井川であることなどから、農地の冠水や低地の住宅の浸水被害が見られます。
- ・木津川右岸・左岸にまたがる加茂地域では、木津川右岸で山地から木津川までの距離が大変短く、しかも山が急であることによる山林からの土砂流出や、木津川左岸の低地で排水不良による内水被害の発生が見られます。
- ・木津川右岸に位置する山城地域では、木津川の支流の多くが天井川であること、また、最上流域にある三上山周辺の花崗岩からなる山腹が崩壊し、土石流となって流下するなど、浸水被害及び土砂災害による被害が見られます。

本市は、急傾斜地も多く、前線の停滞による集中豪雨、台風通過時における連続的豪雨等の自然条件によって、山くずれ等の山地に起因する災害が発生しやすい特性を持っています。こうした災害危険箇所は、「土砂災害危険箇所」をはじめ、「山腹崩壊危険地」、「崩壊土砂流出危険地」として一覧され、また、「急傾斜地危険区域」、「土砂災害特別警戒区域」などの法的な規制を行っています。

これまで自然災害の予防に向けて、河川改修などの河川防災を行うとともに、荒廃地、土砂災害危険地等を整備し、森林の維持、造成を通じて土砂災害から市民の生命、財産を守る土砂災害防災及び林地保全を進めています。そのうち林地保全では、治山事業を実施し、保安林の機能の維持増進を図るとともに、森林の防災機能を高め、水源かん養機能と保健機能を有機的に発揮する保安林を拡充し、生活環境の保全とあわせて地域の防災施設の計画的な整備を進めています。



▲山城地域の天井川



▲南山城水害

②防災にかかる緑

防災機能を有する緑は、「自然災害の防止対策が必要となる」、「市街地における火災等の防止に資する」、「避難や防災機能を有する」といった要素により該当するものに対し、ポイントづけし、解析・評価をします。

表 防災の解析

防災の要素	里地里山などの緑	木津川	公園や緑地や広場	社寺や文化財と一体となつた緑	街路（の並木）	田や畠などの農地	学校や公共施設（の縁）	ため池や身近な河川等の水辺	府県境の緑地	住宅の庭木や生垣
自然災害の防止対策が必要となる	●	●				●		●	●	
市街地における火災等の防止に資する			●		●		●	●		
避難や防災機能を有する			●		●		●			
ポイント	1	1	2	0	2	1	2	2	1	0

防災機能については、公園や緑地や広場、街路、学校や公共施設が重要な役割を担っています。

③市民アンケート調査の結果にみる防災

本調査の「緑に期待するもの」についての回答をみると、災害防止と緑の関連についての意識は必ずしも高いとはいえませんが、本市においてもこれまで水害を中心に、幾度も自然災害を経験しているところであり、その備えを進めていく必要があります。

④防災機能の方向性

本市では、とりわけ木津川右岸側の市北部、山城地域を中心として、急傾斜地等が多く、保安林や砂防地が広く指定されており、その機能を最大限発揮するような整備が求められます。また、防災機能としての農地、ため池の保全も合わせて行う必要があります。

都市化の進展に伴い、市街地の火災への対応として、延焼を防ぐ道路、河川沿いの緑などの確保が必要です。

避難地、避難所及び避難路について、公共緑地、避難経路の確保とも連携して、安全な場の確保が求められます。

3. 緑の課題

本市における緑地の現況と解析・評価及び市民アンケート調査の結果などを踏まえ、緑が有する「環境保全」、「景観形成」、「レクリエーション」、「防災」の4つの役割ごとに、本市の緑の課題を整理すると次表のとおりとなります。

表 緑の役割と課題

役割	今後の課題
環境保全機能	<ul style="list-style-type: none">・里地里山などの緑の保全、木津川等の水辺の環境の保全、緑化の推進・ため池や身近な河川等の水辺、田や畠などの農地の保全・社寺や文化財と一体となった広場の保全・自然と共生する緑のネットワーク形成
景観形成機能	<ul style="list-style-type: none">・里地里山などの緑の保全、木津川等の水辺の環境の保全、緑化の推進・木津川、里地里山などの緑の景観の保全
レクリエーション機能	<ul style="list-style-type: none">・公園や緑地や広場、学校や公共施設の緑、ため池や身近な河川等の水辺の確保・里地里山などの緑、木津川を中心とするレクリエーション地の確保・レクリエーション地を結ぶ緑のネットワーク形成
防災機能	<ul style="list-style-type: none">・里地里山などの緑、田や畠などの農地、ため池や身近な河川等の水辺の保全・延焼を防ぐ街路や道路、河川沿いの緑のネットワーク形成と緑化の推進・避難所としての緑の確保